



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

3度目の智頭町訪問

6月の初め、鳥取県^{ちづちょう}智頭町を訪れた。山に囲まれた山陰地方の盆地。3度目の訪問だ。

岡山、兵庫、鳥取の3県がぶつかる^{おきのせん}ところに沖ノ山(1319メートル)がある。ちょうど山陰と山陽を分ける



(出所：「智頭町観光協会ホームページ」)

る中国山地の背骨の部分で、昔は、特に鳥取側からのアクセスが困難を極めた。深い谷と急な尾根が連なり、しかも人の背丈を越えるようなシダやツルが生い茂り、1メートル進むのも大変だったという。

それでも大正期までは山を切り開き、夏場には林業や炭焼きなどが営まれ、木工で生計を立てている^{きじし}木地師たちも暮らしていた。しかし、冬場は豪雪地帯のため、全員が^{ふもと}麓で越冬。翌年の春までのほぼ半年、山は悠久の昔と同じく、動物や鳥たちの鳴き声と、時々起こる小さな雪崩の地響きだけが聞こえる静寂の世界に戻った。

林業のゴールドラッシュ

智頭といえば杉。中でもこの^{けんのん}剣呑な沖ノ山が、天然の名木「^{おきのやま}沖ノ山スギ」で有名だ。雪深い日本海側の原生林では、雪の重みで垂れ下がったスギやヒバの下枝が地面につき、そこから根を生やして新しい木が育つ^{ふくじよう}「伏条更新」という現象が起こる。同じ遺伝子の子孫を残す手段だが、若木は親木から栄養を奪わず自力で成長するた

め、環境の変化に強く、また、森全体も若返ると言われる。厳しい環境で種が生き残るための偉大な自然の知恵である。

この「伏条更新」を利用して、人工的に下枝を地面に固定して発根させたり、さらにその若木の枝を切って挿し木にしたりなど、苗の増産の研究が始まったのが17世紀のこと。その後、智頭では、鳥取藩の池田家の奨励もあって大いに植林が進んだ。智頭のスギは、そのほとんどが明治以降に植えられたものだが、人工林でもその品質が素晴らしいのは、沖ノ山スギの良質な遺伝子が伝えられているからに違いない。その頃に植えられたという初期の杉が、樹齢350年にも達しながら、まだ10本以上も残っているという。智頭町は、今も面積の93%が森林である。

明治になると、同地の^{いしたにげんぞう}石谷源蔵という商人が、前述の挿し木技術の改良に成功し、苗の量産が可能になった。また、源蔵は智頭スギのブランド化を進め、あるいは、それまでバラバラだった林業を組合としてまとめるなど、智頭林業の基盤作りに生涯を捧げた。

智頭の林業が全盛期を迎えたのが大正から昭和にかけてで、当時の石谷家の家長、伝四郎が、

材木を運搬するため、^{いんびせん}因美線(現・JR西日本)を智頭まで延長させようと国鉄に働きかけた。そして、多額の私財を投じた結



重要文化的景観「智頭の林業景観」
(出所：鳥取県智頭町ホームページ)